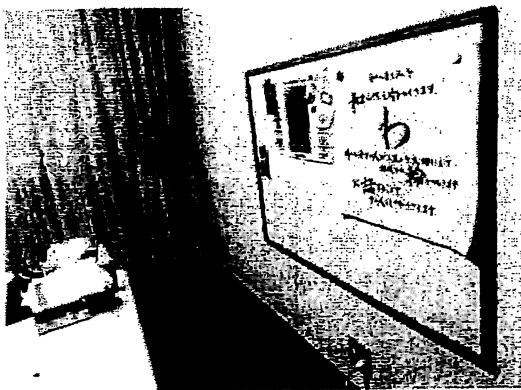


8/16 読

病棟あるべき姿とは



西原さんの部屋に、看護士が貼った「緩和ケアセンター」のポスター（画像は一部修正しています）

今年6月から、中津市民病院（大分県中津市）は「入院基準」という院内ルールを見直した。緩和ケアセンターで過ごすがん患者の西原ケイ子さん（86）の退院話をきっかけに、病院幹部が話し合い、緩和ケア病棟に60日までしか入れられないという取り決めに緩和することになった。

原則は、それまでと変わ

今年6月からは、中津市民病院（大分県中津市）は「入院基準」という院内ルールを見直した。緩和ケアセンターで過ごすがん患者の西原ケイ子さん（86）の退院話をきっかけに、病院幹部が話し合い、緩和ケア病棟に60日までしか入れられないという取り決めに緩和することになった。

武末文男さんは言う。

社会的入院とは、特段の治療は必要ないが、退院後の行き場がないため、入院を続ける状態

を指す。高齢化が進み、病床が不足するなか、歯止めがなくなれば、本当に必要なときに「満床」ということになってしまいかもしれない。ただ一方で、多くの患者や家族は、たとえ効く可能性がほとんどなくても、抗がん剤などの積極的な治療に、ぎりぎりまで望みをかける。「緩和ケア病棟」と聞くだけで抵抗感を示す人もいる。

「最期まで治療を頑張って本人や家族がよかったと思えるなら、それも間違いではないと思います。でも、それはあくまで一つの選択。ほかにも選択肢があることを知ってほしい」。同病院消化器内科で抗がん剤治療を担当する医師、宮ヶ原典さんは語る。

中津市民病院より2年早く緩和ケア病棟ができた同県別府市の鶴見病院では、病床が埋まるのは半分ほどだ。担当する特任副院長の赤嶺晋治さんは「緩和ケア病棟に対する一般的な理解が進んでいない。人生の最終段階についてのイメージがないまま、準備できずに最期を迎える患者さんや家族が多いのではないだろうか」と指摘する。

緩和ケア病棟は今、矛盾を抱えながらあるべき姿を探している。この地域だけではない。おそらく全国各地でそれぞれに、関係者の模索が続く。

7月のある晩、西原さんはセンターの自室で静かに息を引き取った。

「私はね、先生のお役に立てることがうれしいの」。生前、そう語った西原さんの亡きがらは、「献体（医学実習のための遗体提供）したい」という遺志に沿って、西原さんに関わった医師たちの後輩が学ぶ九州大へ運ばれた。

（編集委員 高梨ゆき子）
（次は「前立腺がん」と生きる」です）